邪馬壱国八女説

真野和夫

はじめに

邪馬壱国の所在地論争については、すでに多くの研究者・アマチュア入りまじってさまざまの説が出されているが、いまだに結着がついていない。周知のように邪馬壱国の所在地に関しては大きく九州説と近畿説がある。前者はもっぱら『魏志倭人伝』に基づく研究から導き出されており、一方後者は考古学上の観点からの主張である。しかしながら、後者の考古学的な遺跡や遺物（纒向という大遺跡・前方後円墳の分布の中心であり巨大古墳の集中地・三角縁神獣鏡の出土分布の中心など）から推定する考え方は、古墳時代の政権中枢の所在地すなわち初期ヤマト政権の中枢の位置するところとしては「確かにそうだ」と言えても、それがなぜ邪馬壱国と結びつくのか、という点に関して十分に説得力のある答をもっていない。当時（卑弥呼時代）の日本の中心であることと邪馬壱国の所在地とは別の問題なのである。

不思議なことに、近畿論者は卑弥呼の邪馬壱国がそのまま古墳時代の政権に連続することに対し何の疑問もいだいていない。この論理にはまったく根拠がないばかりか、証明もされていないのである。当時のアジア世界の中心中国の王朝が「親魏倭王」の金印を下賜して冊封したのは、「当時の日本（倭）の中心勢力に違いない」と単純に思い込んでそのように思考しているにすぎない。もし、「纒向遺跡の発掘が進展すればそのうち確たるものが出るに違いない」と思っているとすれば余りにも楽観的だ。

では、一方の九州説の場合はどうか。こちらは『魏志倭人伝』という確かな中国文献に基づいており、近畿説とは段違いの根拠に立脚しているという強みがある。

ところが、当の『魏志倭人伝』の記述が一筋縄ではいかないため、解釈しだいでどこにでも邪馬壱国をもっていけるかのような風潮を生み出し、今日の混迷状態となってしまったのである。こういった状況をつくり出した学界にも大きな責任がある。邪馬壱国問題は日本古代史上の大問題であるにもかかわらず、多くの謎解き気分のアマチュアの参入によって邪馬壱国を扱ったというとまじめな研究的内容のものまでもが、その世界で一種のうさん臭い目で見られるようになって

しまったのである。また、邪馬壱国問題は「審判のいない論争」と言われるように、それぞれが言いっぱなしで、ある見解にとるべき重要な点や示唆があってもほとんど問題とされることはない。悪く言えば無視である。まじめな研究実績の積み重ねが行なわれていない。これでは解決に向っていくはずがないのである。

ここでは、邪馬壱国について位置を論じるに当って、気がついたいくつかの点について述べることとする。

一、変更無用の『倭人伝』

現在我々が『倭人伝』を勉強しようとする時にまず見るのは、漢文のものではなく「書き下し文」となった『倭人伝』であろう。流布しているのは山尾幸久の『新版　魏志倭人伝』である。ところが、この『倭人伝』は肝心なところが改変されている。『魏志倭人伝』は原本は残っていないので、十二世紀の版本によるしかないが、それと比較すると驚いたことに、邪馬壱（台）、景初二年（三年）、壱（台）与など十ヵ所ほどが改変されている。もちろん改変に当ってはそれなりの理由づけがあるわけであるが、史料は変えてはならない。これは鉄則である。例えば、邪馬壱国についていえば、邪馬壱ではどう逆立ちしても「ヤマト」とは読めないのであるが、邪馬台であれば「ヤマト」と読むことができるし、『後漢書倭伝』や『隋書倭国伝』に「邪馬台」と記されているという事実とも符合することになる。しかし、これらは近畿論に都合のよい理由づけである。『後漢書倭伝』や『隋書倭国伝』を冷静に読めば、これらは五世紀以後の日本の政治的中心地「大和」を『魏志倭人伝』の「邪馬壱」と混同させた結果にほかならないことに容易に気がつくのである。

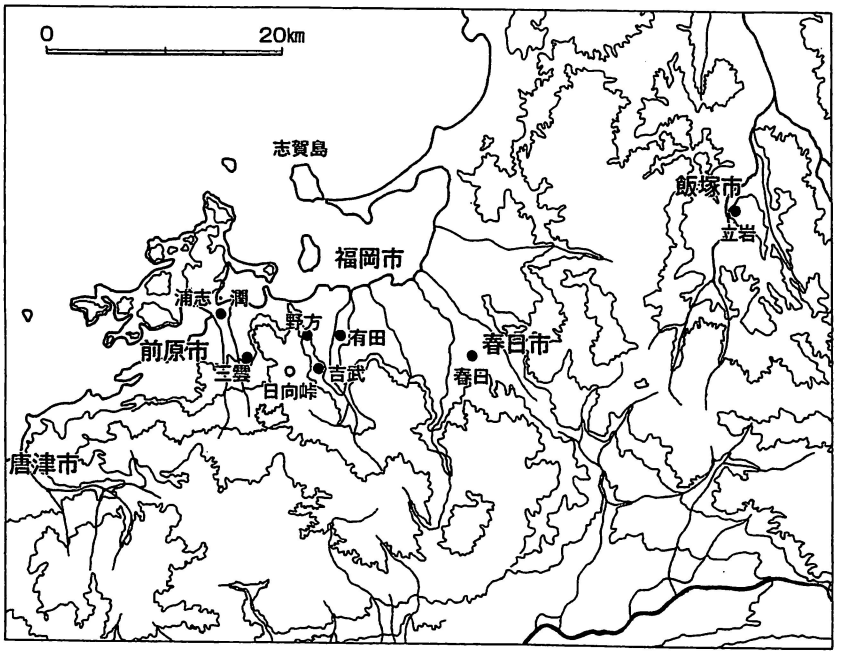
また、景初二年は卑弥呼の使が魏都に向った年である。これを景初三年と変えた理由は、「二年には魏は北の公孫氏と交戦中で卑弥呼の使が行ける状況ではなかったに違いない」という一方的な思い込みと、『日本書紀』神功紀に引用するところの『倭人伝』年号にあることは明らかで、一応もっともらしい理由づけである。『倭人伝』に景初二年とあるのになぜ『日本書紀』が三年と記したのかをもっと探るべきであろう。

二、『魏志倭人伝』の新解釈

邪馬壱国の位置を問題にするとき、これまで研究者をもっとも悩ませてきたのは、『魏志倭人伝』の記述する邪馬壱国までの道程であることは間違いない。具体的に言えば、帯方

郡から伊都国を経由して邪馬壱国へ至る道筋として記述された方位と距離が曲物ということになっている。韓国の南端から対馬・壱岐・末盧・伊都についてはまず対象地にほとんど異論がない（本当はそれぞれピンポイントでどこかということが問題なのであるが）ところから、距離も方位もそれほど問題視されることはなかったが、その先とくに投馬国と邪馬壱国では方位はとも角としてそれまで記述された距離ではなく（所用と思われる）日数、それも「水行」や「陸行」という表記法となっているために難解を通り越して皆目見当のつけようがないという状態で、結局さまざまに推考してみたものの誰もが納得するような対象地に行きつけないのである。

その理由は一言で言えば、やはり先入観のなせる誤解が発端となって袋小路に陥っているとしか言いようがない。袋小路の入り口は「奴国」である。奴国はあの有名な「漢委奴国王」の金印を西暦五七年に後漢の皇帝から下賜された弥生時代の北部九州の国の一つである。この奴国についてほとんどの古代史や考古学の研究者が福岡平野の中枢部（御笠川と那珂川に挟まれた地）、もっと極言する研究者は春日市の須玖岡本遺跡群と考えている。そこでは弥生時代中期末（紀元前一世紀中ごろ）の甕棺墓から三十数面の前漢鏡・ガラス璧などが発見されていて、伊都国三雲と並ぶ北部九州の二大勢力の中心地と考えられているからである。



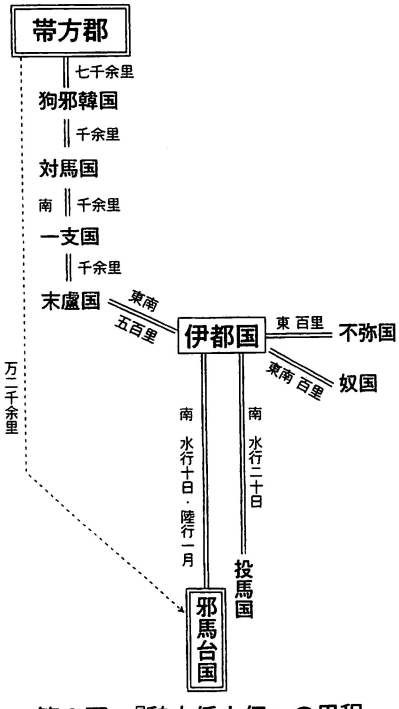
第１図　「奴国」はどこか

しかし、この遺跡群と「奴国」を結びつける考え方の根拠

としてあげられるのは、儺県・那津などの遺称だけである。「金印をもらうような国だから当時の北部九州（倭）の最有力国に違いない」という、なにやら邪馬壱国近畿論と相似た先入観のなせる理論上の構図がすけて見える。なぜこのように言えるのかを説明しよう。『倭人伝』には「末盧国から伊都国まで五百里」、「伊都国から奴国まで百里」と記述されている。そうであれば、奴国の伊都国からの距離は末盧国～伊都国間の五分の一である。ここで実距離との換算である。末盧国は現在の唐津市付近にあった国で、伊都国は前原市にあった国である。その距離はほぼ三〇キロメートル（ほぼというのは『倭人伝』が末盧国・伊都国といっている場所がピンポイントでわからないからである）。ならば、「奴国」は伊都国から六キロメートル付近にあることになる。これが『倭人伝』を先入観なく素直に読んだ結果である。つまり『倭人伝』の伝える「奴国」は春日市まで到達せず、せいぜい伊都国東側にある山塊を越して早良平野止りの地にあることになる。そこで「奴国」に相応しい国を探すしかない。結論的に言えば、吉武遺跡群（国史跡）である。

同様にして、南へ千五百里（この数値は郡からの距離計算によって導き出される）の邪馬壱国までは約九〇キロメートルほどということになる。邪馬壱国に至る手掛りは「水行十日、陸行一月」だけではなかったのである。糸島から南へ九〇キロメートルのところというと筑後川以南の地、すなわち筑後・八女地方である。この位置の想定は「（邪馬壱国の）南に狗奴国有り」という記述によってさらに現実味を帯びたものとなる。狗奴国は「狗古智卑狗」という指導者がその名称から菊池地方の首長と想定されることから、熊本県菊池・山鹿地方と考えられるからである。その代表的な遺跡が山鹿市方保田東原遺跡（国史跡）で、三世紀中ごろの近畿系土器が多量に出土していることで知られている。

この筑後・八女地方に邪馬壱国を比定する考え方は『魏志

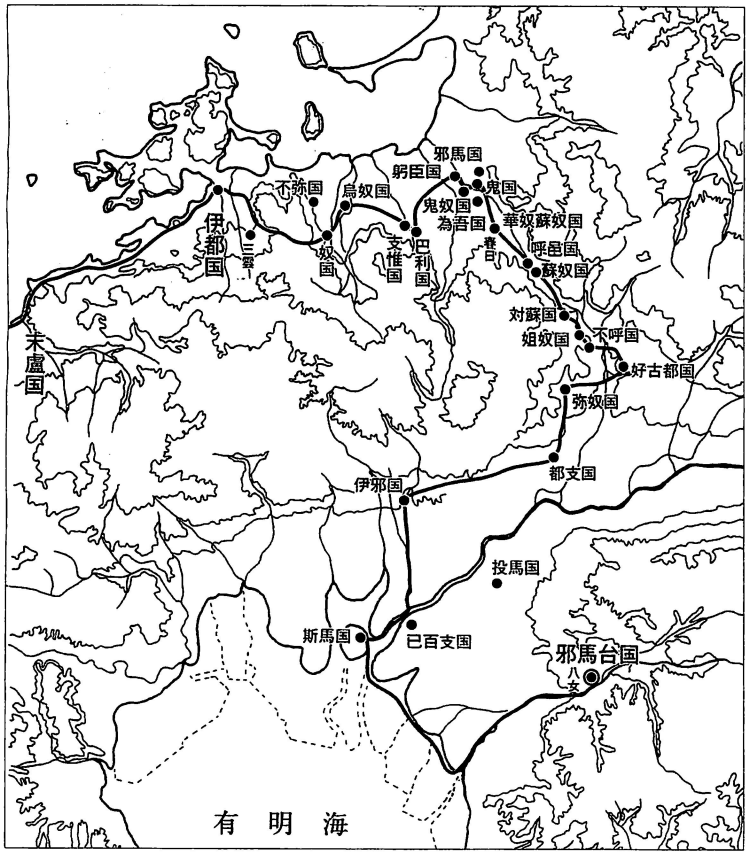


第２図　『魏志倭人伝』の里程

倭人伝』の里程記事を忠実に辿った結果達成されたということが重要である。里程の「里」を実距離に変換するというごく単純な、しかし誰も気がつかなかった発想によって邪馬壱国に行き着いただけでなく、「奴国」についても従来なかば定説化していた比定地がどうも違うようだという副産物まで手に入れたのである。これはまさに想定外の成果であった。

三、魏使のルートの復元

次に『魏志倭人伝』の記述をもとに邪馬壱国の位置をさらに確実なものとするために行った作業が二一ヵ国の比定である。『魏志倭人伝』の大方の読者は、「女王国自り以北は、其の戸数・道里略載を得べきも、その余の旁国は遠絶にして詳を得べからず。次に斯馬国有り。…（中略）…次に奴国有り。此れ女王の境界の尽くる所なり」の一文を読んで、「斯馬国から奴国までの二一ヵ国」を「その余の旁国」と思い込んでしまう。書き下し文はそれぞれの文章に句読点がつけてあるのでそうなるのは当然である。原文の漢文にはもちろん句読点はない。ここは「其の戸数・道里……遠絶にして詳を得べからず」を挿入文とみなし、「女王国自り以北は、次に斯馬国有り……次に奴国有り。此れ女王の境界の尽くる所なり」と読むべきである。したがって、二一ヵ国は邪馬壱国の北にある斯馬国から（伊都国の東南にある）奴国までを順次記述したものとみな



第３図　魏使のルート

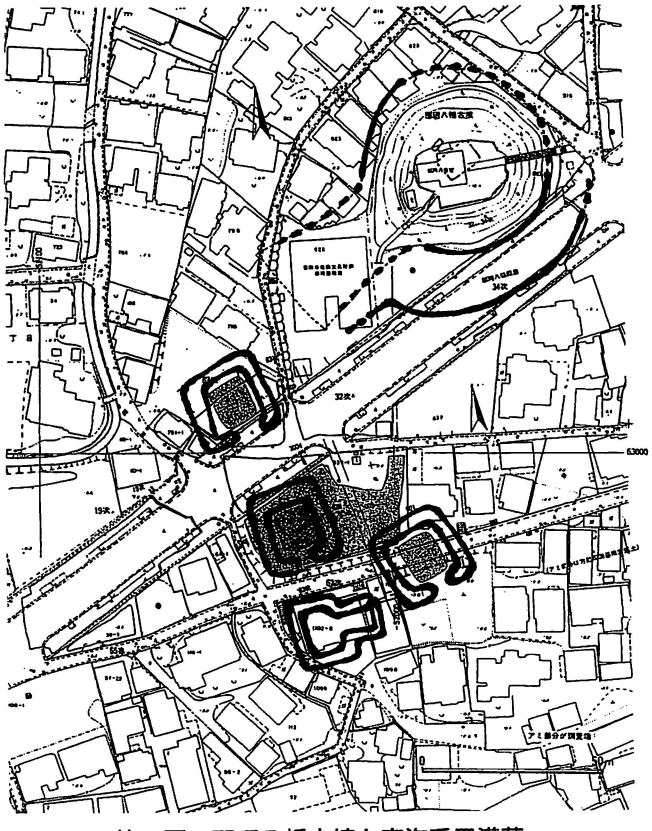
ければならない。

ここまでくると、この二一ヵ国が伊都国を出て邪馬壱国までの魏使の辿ったルートではないかと気がつかないのは余程の迂闊者である。あとはそれぞれの国を現実の遺跡に比定する（当てはめていく）作業である。これには遺称地と遺跡が手掛りとなる。すべての国名が遺称として残っているわけではないが、ルートとしては福岡平野を横切り、二日市地狭帯を抜け、さらに筑後川北側のクリーク地帯を避けながら山裾を通っていくという比較的単純なものとなるので考え易い。丹念に卑弥呼時代（三世紀前半・弥生終末期）の遺跡を洗い出す作業から始めればやがて辿りつくことになる。

この作業で自分でも感激したヒットは「華奴蘇奴国」の発見である。これを「かなさなこく」と読むともうわからない。詳しいことは省くが、この国は「倭の長の国」である。比定地は春日市の「曰佐」。これが二一ヵ国のちょうど中央あたりにあることでルートの大枠が固まることとなった。この魏使のルートの復元によって邪馬壱国を八女に比定する考え方は一層補強されることになったのは言うまでもない。

四、卑弥呼時代（三世紀前半）の北部九州

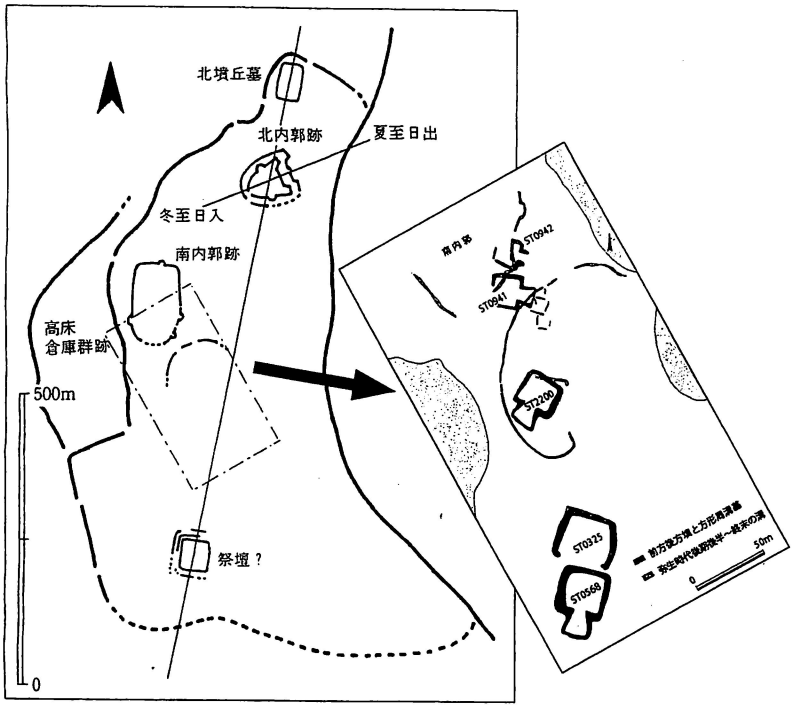
これまでの邪馬壱国論に欠落していた重要な視点が北部九州の卑弥呼時代すなわち三世紀の状況についての認識である。この認識の欠如は考古学者に責任があることは言うまでもないが、とくに九州論の場合致命的とも言うべき結果を招く。なぜなら、三世紀の前半から中ごろにかけての時期は近畿勢力が大挙して北部九州に武力侵攻し、各地の拠点集落



第４図　那珂八幡古墳と東海系周溝墓

（国）を一斉に壊滅させ、支配下においていくという北部九州弥生社会の一大変換期に当っているからである。

そのことを証明するのが、近畿系（纏向）の土器であり墳墓であるが、多くの考古学研究者はそのことにまだ気がついていない。伊都国の平原一号墓を嚆矢として、とくに那珂遺跡群や藤崎遺跡群・吉野ヶ里遺跡にある東海系墳墓はよくその事実を物語っている。邪馬壱国へ向う魏使一行はまさにそのような混乱した状況の中を旅したのである。絶大な力を持つ魏の使に対し近畿勢力と言えども手出しはできない。同様に冊封を受けた邪馬壱国に対しても容易に武力行使はできないことになる。そこで、近畿勢力は背後の狗奴国をけしかけて戦わせ、様子をうかがったのである。ところが、邪馬壱国がすぐさま帯方郡へ訴え出たために、それ以上深入りすることをせずに邪馬壱国から手を引いて温存したのである。八女地方に五世紀の石人山古墳（前方後円墳）まで近畿系の大きな墳墓がないのはそのためである。



第５図　吉野ヶ里遺跡の東海系周溝墓

まとめ

邪馬壱国が北部九州の先進地＝玄界灘沿岸国ではなく内陸部の八女地方ということになると、これまでの邪馬壱国に対する考え方の変更を迫られる。例えば、邪馬壱国の卑弥呼が「親魏倭王」に相応しい強国の女王かということにかかわってくる問題もある。一つ具体的な例をあげると、邪馬壱国が北部九州の国々や壱岐・対馬などを支配していたかどうかと

いうことがある。答は「否」である。邪馬壱国はどこも支配していない。壱岐・対馬や奴国・不弥国などに卑狗・卑奴母離（ひな）という官が配置されていることは動かぬ証拠の一つである。この官は近畿勢力が地方支配のために置いた（ないしは地方の有力者に与えた）一種の称号あるいは役職名である。

しからば、なぜ魏朝がそのような強大国でもない国の卑弥呼に「親魏倭王」の称号を与え冊封したのかという疑問がわいてこよう。この答は、近畿勢力が魏と敵対する公孫氏（あるいは呉）と手を結んでいたからと考える以外にない。魏はそこにクサビを打ち込んだのである。三世紀前半段階で近畿勢力が公孫氏と交渉があったことは初期の古墳から出土する画文帯神獣鏡の存在によって実証されている。

挿図出典

第1図　拙著『邪馬台国論争の終焉』

第2図　前同

第3図　前同

第4図　「那珂22」福岡市埋蔵文化財調査報告書597集　一九九九

久住猛雄「前期古墳の再検討」『第9回九州前方後円墳研究会大分大会』発表要旨・資料集　二〇〇六

第5図　七田忠昭「吉野ヶ里遺跡」と『鳥栖市誌』より作成（豊後高田市鼎一〇五）